



新春座談会

新年あけましておめでとございます。東川町では昨年から新たな町立図書館の検討が始まりました。そこで今年には、本、読書文化、そして町の図書館など、「本」をテーマにお話ししたごとお集まりいただきました。
(文中敬称略)

「本日はご出席いただきありがとうございます。今年には図書館について皆さんでお話ししようということですが、まず「本」という基本的なことからお話ししましょう。」

「今一番何が重要かというところ、教育だと思えます。農村からとんとんと子どもが減っていく、農村の役割を認識しない、国内のものを買わない、というのは、やはり教育に起因しているのではないかと思えます。教育と本というのは、ある意味不離一帯、同質的なものではないでしょうか。子どもたちは自ら「これはなんだらうっ」と疑問を持って問いかけるようではなければいけない。そんな中で本というのは非常に大きな役割を果たすと思えます。」

「私が町長になってすぐだったと思えますけれど、図書館の話が出ました。その時私は否定的な答弁をしました。それから十数年経ちました。」

本と読書はなぜ必要か？

福田 私は今から18年前に旭川市から東川町に移って来ました。その時に小さな公民館に小さな図書館がありました。うーん、なんて言っているのか。ちょっと残念だったんです。30年前、旭川にも狭くて小さな図書館

館しかなかった。だから私は、子供を育てながら子ども文庫活動をやっていました。図書館から3千冊の本を借りて、町内会の集会所で週一回子どもたちに貸し出すミニ文庫活動をずっとやってきたんです。

夫が何よりこの水と自然がいい、この町に来たんですけれど、残念ながら図書館施設が不十分だな、と思えました。それで町長に手紙を書きました。松岡さんが町長になったばかりだったと思えます。

書きましたら、すぐに文化交流館に図書室が出来ました。「町長に手紙を書いたら実現した。なんて素敵なことでしょう」と思いました。それで文化交流館でボランティア活動をするようになった。

その後もお手紙を書きました。「学校図書館にもぜひ司書を配置してほしい」というもので、それならそれも実現して「なんて素敵なお町なんだらう」と思いました。

子どもは自分の居場所として本のある場所に行くんです。これは一体なんなんだろうね。本のある場所においで」と言ったら来てくれる。そこには本があるということなんです。その本が楽しいものであったり、自分が知らなかったことを教えてくれる本で

あったり。小さい子だったら自動車の本が好きです。それを何回も、何回も読むんです。それが子どもなんです。子どもって本当に素晴らしい読者なんです。

だから作家の皆さんも言っています。「子どもは本を好きになったら、何度か何度も読んでくれる。子どもほど素晴らしい読者はいない」と。子どもたち、この町の未来のために、いろいろな好奇心、不思議に思うことを解き明かしてくれる本のある場所をつくりたいな、と思っています。

本はなぜ必要か。これって人間が作ってきた一つの文化というか、すべての基本は本を読む、という行為の中に秘められているんじゃないのかな。そしてそれぞれの人にとってそれぞれに本との出会いがあるような気がするんです。

澤田 私は、本を読むかどうかという観点よりも、子どもはどんなふうに乗って本で遊ぶか、本の楽しさを知ることが出来るか、なのだと思っています。

子どもにとって必要なのは、いろいろな好奇心とか知識を自分の中に蓄積することだと思っています。それは紙でもいいし、テレビでもいいし、何でも良いんです。

と共感するものがすごくあった。小さい子は小さいなりに本を読んで、共感するものがあるということを知っていきいんじゃないかなと思うのね。

私はすごく本に助けられたんです。最初は漫画で、次郎物語を読んでからは「人間っていいなあ」と考えられるようになった。子どもの時の感じ方は今の自分は忘れてはいるんだけど、大切なことなんだろうなあ、と思うのね。

宇山 子供たちは札幌と江別で育ちました。札幌や江別は子育て環境がよく、札幌ではやまびこ座やこま座という劇場があって、よく子供を連れて行きました。読み聞かせの日もあり、楽しみにしていました。

私が小さかったころ、この町のリリー保育園に通っていて、毎日見てい

た本がありました。その本は、私の中では小人さんたちが動くんです。本の中で小人さんが帽子を外したりして動くんです。

その世界観は誰にもわかってもらえなかったけれど、今になっても印象的な本で、その本にまためぐり合いたいと思っています。まだ出合えていません。あれはあの年齢だったからかもしれない。ちょっと分厚いタンバリンをたたく小人や帽子をかぶっている小人がいたり、当時3歳4歳くらいでした。今もリリー保育園の前を通るとあの本のことを思い出します。

そんな経験をしているからか、子供たちにはとにかく絵本や本に触れさせました。

子供たちが大きくなった今はどうかと言いますと、その当時は意外と覚えていないことに気づきます。でも今でも本が好きで読んでいる姿は小

だけども、中でも本というのは格別なもので、図書館は何千年も前から紙の粘土などに書いていた人間の「知」の歴史を記録し保管しておきた。最初は一部の貴族、支配者しか見ることが出来なかったし、女、子どもは入れなかった。お金持ちの人しか見ることができなかった。

歴史を積み重ねていくうちに、子どもが入れるようになり、女性が入れるようになり、だれでも入れるようになっていった。それは人類の歴史の中に詰まっている知恵だと思っています。

人間は蛇を見ると、かみつくかどうか知らなくても、どんな人でも恐がるそうです。宮沢賢治(※1)に言わせると、人間には昔からは虫類は恐ろしいという体験が刷り込まれているから、最初はこわいものだと思ってしまうそうです。

蛇を恐いものと思うように、本というの人類にとって本に大切なものなんだ、ということを生まれた時からみんな知っているんだらうな、と思っ。小学校6年生の時に「次郎物語」(下村湖人作)を読んだんです。私は農家の娘で、すごく主人公がまぶしかった。どこまで読み込んでいたかは覚えていないけれど、「本当のことを書いてある本」というのはあるんだなあ

さいころの経験が今に生きてくるんだな、と感じることが多くあります。

今は同じ本を読んだ感想を、父と子で「あのページのあれがよかった」とか「私はあの部分が好きだった」と話しています。感じるころは人それぞれなだけけれど、本を読んだこと、考え方や景色が見えた時、家族で共有できること、うれいさ、と思えます。

子供は自分の目標や目的を見つけた時、それに向かって学び、たくさん言葉を集めるので学べる喜びはなものにも代えがたいと思えます。映像は一瞬で終わるけれど、文字になったものは、心で想像し、それが画像になって見えてきます。

読書と教育はつながっている

林 本の役割は、宇山さんも言われましたように想像力を養うものだと思う

【出席者】



宇山 夕香里さん(45歳)
東川町出身。旭川東栄高校卒業。農業。東川町農業協同組合女性部7レッシュミズ会長。7年前東川町に帰郷。札幌在住時は食育、環境教育などの活動をしていました。



澤田 佑子さん(69歳)
東川町出身。1994(平成6)年から自宅敷地に喫茶ギャラリー兼イベント用小ホールの叢舎(くさむらや)を開設、自主企画のコンサート、落語、講演会などを随時開催。



福田 洋子さん(68歳)
旭川市出身。1997(平成9)年東川町移住。町図書館建設検討委員会委員。1987(昭和62)年創業時からこども富貴堂勤務、同店店長。



松岡 市郎さん(64歳)
東川町出身。町長。1971(昭和46)年、室蘭工業大学中退。東川町役場職員。2003(平成15)年から現職、4期目。



林 万里(かずさと)さん(60歳)
東川町出身。教育長。国学院大学経済学部卒業。1979(昭和54)年、東川町役場職員。東川町教育委員会学校教育課長、東川町役場企画総務課長などを経て2012(平成24)年3月から現職、2期目。

(順不同)